

終戦前後の思い出

宇賀神妙子 鹿沼市

私は昭和8年、荒川区で生まれ、育ちました。下町のせい、隣近所お互いに声を掛け合い、料理に限らず、物のやり取りなどをして兄弟のように心遣いをし合って暮らしていました。

10歳の時だったと思います。ある日、ものすごい地震のような音がしました。一発だけでしたが、大きな野原に「空から落ちてきた」という話が近所から伝わってきて、私は見に行きました。鉄棒で囲いがしてあったのですが、大人が10人は入れるような大きな穴がありました。焼夷弾ということが後でわかり、平和に暮らしていたのに、恐ろしい気持ちになりました。

その後、学校や隣組で小学生から大人に至るまで、防空ずきんをかぶることが義務付けられ、暑くても寒くてもかぶらないと怒られました。昭和18年、東京の空襲がだんだんひどくなくなったので、兄嫁の栃木の実家に家族と離れ、一人で疎開することになりました。

●栃木市に疎開する

栃木市の赤津小学校に来たのは4年生の時でした。全校生、竹やりで人を殺す練習をしました。毎日のように竹やりをもってツキをやらされた

のです。このツキの練習で、栃木の寒さにたまらず、つい手を丸めていたら、女の先生でしたが、横からピシツと思いきり打たれました。おかげで手が熱くなりましたが、ひどく痛かったのを今でも忘れません。今思えば、竹やりで人を殺す練習を学校でするなんてね。

疎開した家は農家で大きな家で、東京にいた時より遊び放題でした。おじさんと2人の中学生、2人の小学生の男の子ばかりがいました。そして田植えなどの農作業をするときに必要な馬が一頭、これも家族でした。毎日の食事だけでも大変な騒ぎでした。

農家では猫の手も借りたいぐらいの忙しさなので、何もできない私でも、田植えや麻の引き抜きの手伝いをさせられました。引き抜いた麻は私の身長以上もあり、それを束ねて運び、大きな湯釜に入れました。作業の間にサツマイモ、ジャガイモ、サトイモの蒸かしたのをおやつに食べさせてくれました。米も作っていてほとんどは供出だったけれど、少しは食べられました。

●東京の家では

東京にいた二番目の姉が私を心配して東京に連れて帰ると言っただけ、私は断りました。「おかしな子だわ」と姉は言いましたが、東京に帰っても食べ物が無いことを知っていたからです。東京

の父親が胃がんで入、退院を繰り返していたので、そのこともあって帰る気になれませんでした。

二番目の姉が食糧を求めて埼玉まで買い出しに行くのに、汽車の切符を並んでやっと手に入れ、混雑した汽車に乗るのも簡単ではなかったという事を後で聞きました。汽車も出入り口ではなく、窓から乗って、窓から降りるという始末。背が小さい姉だったから、人々の足をくぐり抜けながら乗り降りしたのだとか。

父親が持っていた着物や剣舞用の袴など、上等なものを持って行って食べ物と物々交換したけれど、米などは手に入らず、主に野菜と交換したようでした。サツマイモなどは苗にするところを取り切った、味もそっけない根っこだったが、ないよりはましということでしたが、よくがんばり屋の姉は家族を支えてくれました。よくやってくれたと、今は亡き姉に感謝しています。

●終戦後も苦労を

戦時中、いちばん上の姉が薬剤師の専門学校を卒業するとすぐに上海へ行くよう命令され、父も連れ立って行きました。中国人はよく勉強するので、ぜんぜん勉強しない妙子を連れて行くのか、と話していたのを憶えています。今思えば、中国へは行かなくてよかったと思っと思っています。おそらく帰れないことになったと思います。

今まで住んでいた東京の家は丸焼けになりました。終戦後、両親と上海から帰った姉、次姉、兄2人の家族全員が私の疎開先にやってきました。

まもなく、疎開先のおじさんは2人の女の子を連れて女性と再婚しました。そのため私たちは3畳ほどの小屋に寝泊まりすることになりました。水がなく、ため池の汚れた水を汲んできて、鉄びんに入れて沸かす、という作業は父親の日課でありました。

しかし、宮崎県生まれの父親は栃木の冬の寒さに我慢できず、わずかなお金で買った大きな鍋（中華鍋）の中におにぎりを作って入れ、私たちは宮崎を指すことになりました。しかしあまりに遠く、途中、大分で下車して旅館に一泊し、再び宮崎に向かいました。

ところで、この鍋を「中華鍋」などと言おうものなら、大変でした。終戦になっても「中華」つまり中国の事は堂々と口に出せない、言葉も自由に使えない時代だったのです。

宮崎では、父方の親戚が家に入れてくれたものの、あまりに人数が多いので、ここでも追い出されることになってしまいました。父親が昔、土地を買っておいたとのことで、その物置小屋を改装して6畳の部屋と、土間を台所にして、廊下と

板の間の兄の部屋を作り、6畳部屋は私たち5人の部屋にしました。

●高校へ、大学へ

そのうちに兄から「高校へ行け」と言われ、何とか高校に入ることができ、3年間通って卒業することができました。

この3年間、新聞配達をして500円の手当をもらっていました。ある日、離れてあったシェパードに追いかけてられて怖い思いをしました。もう続けられないと思い、辞めることを経営者に話すと、「逃げないでにらみ合っていれば、犬の方から逃げる」というのでしたが、かまれてからは遅いので、どうしてもだめだ、と話すと、今度は「事務を手伝ってくれ」と言われ、1年間仕事をしました。

そのうち、次兄が東京に家を建てて、母と私を引き取ってくれました。兄はアルバイトをしながら、また奨学金をもらいながら大学に行くよう私に薦めたのですが、成績が悪く受けることはできませんでした。それでも兄は強く薦めるのです。ぜんぜん勉強もしないし、その気もなかったのですが、募集している大学があるからと、願書を取ってきてくれたので、仕方なく応募して何とか入りました。ただし夜間の短期大学です。

というのも、兄が受験料と言ってくれた7千

円を使い込んでしまったのです。大学に行くどころか、食べ物もまだ満足にありませんでしたから、成長期の私の腹を満たすために1個10円のコッペパンにお金が費やされました。今でもあのおいしかった味が忘れられません。2年間行くつもりでしたが、さらに2年、4年間続けていくことになりました。

行って良かったと今では思っています。経済の勉強をしたので、政治などをはじめ、社会を広く見ることができるようになったと思います。今は政党にも入って、勉強する楽しさが増えました。

●こんな時代は二度とあってはならない

私達の昭和は暗い時代でした。仕事にもつげず、食べ物もほとんどなく戦争の傷跡と、着るもの、食べるものは全くと言ってよいほどなかった。宮崎にいたころ、4キも離れた山の手に親戚の畑を借りました。肥しなどあるわけがなく、父がありあわせの木で車を取り付けた小車で山道を牛馬のフンを拾いながら歩きました。いっぱいになるまで拾い集めて畑に入れました。

高校から帰るとすぐにカバンを放り投げて父の手伝いに向かいました。すぐに自分の後を追いかけて手伝おうとするのがうれしかったのでしよう、からいもあめ（サツマイモで作ったあめ）を1個、私にくれました。父の弟には陸軍の中將

になった人もいて、大変厳格な家庭環境にいたとはいえ、いつも怒鳴りつけられてばかりいる私でしたが、たった1個のこのあめの思い出は忘れられません。

この頃には父の胃がんがだいぶ進行していて、食べ物もロクなものがなかったし、青白い顔色だったことを忘れもしません。

青春どころか、人間そのものも失われている時代でした。戦争は人を狂わせます。このような時代は二度とあってはならないと思っています。